

学生相谈室报
第 32 号



学生相谈室报

第 32 号

2019年度版

 西南学院大学



西南学院大学

非日常的な事態での体験は本当の自分を揺り動かす

学医（精神科医） 前人間科学部教授（現感性教育臨床研究所代表） 小林 隆 児

新型コロナウイルスのパンデミックによる非常事態宣言の延長下にある東京ではこの原稿を執筆している。今春、西南学院大学を定年退職し、8年間の単身赴任生活を終えたからである。在学生はもちろんだが、とくに新入生のみなさんはとてつもない不安に襲われ、これからどう大学生活を過ごしてよいやら戸惑うことばかりではないかと同情の念を禁じ得ない。私自身も大学に入学直後から大学紛争の渦中に巻き込まれ、精神的に大混乱に陥っていたことを思い出す。大混乱と言っても、大学紛争当時とパンデミックの今とでは随分と性質を異にすることは承知の上だが、誰でも人間一生のうちには人生の根幹を揺るがすような体験をするものである。

本学在職中の8年間、どうすれば学生たちの感性に訴えかける教育ができるかを私は試行錯誤してきたが、昨年度の講義を聴講したある女子学生の体験談を読み、多少なりとも救われた気持ちになった。私が講義で供覧する母子交流場面の録画ビデオを毎回みていくうちに、彼女は「(母子関係を通してみる人の)心の動きについての認識が大きく改まった。このことによって私は自己の成育歴を振り返るきっかけを得て、事例の子どもたちに思いをはせたように、自分自身の幼少期についても……考察することができるようになった。そこから、自らの中に潜むアンビバレントな思いを自覚し、今まで自らを押しつけてきた思い込みや葛藤から脱出する糸口を掴んだように思う」と記しているが、自分の内面に向き合い、このような自分への気づきを得るまで彼女は「正直死ぬほどつらかった」とも述べている。

本日の日本経済新聞朝刊の文化欄（2020/5/17付）に掲載された歌人大辻隆弘氏のエッセイ「休校ののちに」で、ニュートンが万有引力を発見したのは、ベスト禍でケンブリッジ大学が閉鎖されていた時で、湯川秀樹が中間子理論の端緒をつかんだのは、室戸台風で大学が休みの夜だったという記述があった。恥ずかしながら私は知らなかったが、入学直後の私も似たような境遇であったと思う。大学の講義に対する幻滅から学ぶ意欲が失せ、文字通り自我同一性拡散状態に陥ってしまった。一時は本気で大学を中退しようとも考えたが、寝台列車に乗って遠い田舎から福岡に出てきた母親の懸命な説得で思い留まることができた。人間誰でもこのような深刻な事態に陥った時には、もがき苦しみ、懸命に不安に打ち勝とうと新たなことに挑戦を試みるものである。私を救ってくれたのが大学でのボランティア活動であった。自閉症の療育ボランティアとして活動に参加する中で、自閉症という不思議なこころの病に出会い、そこで素人同然の私が子どもたちとの関わりを通して得た数々の体験が私の研究者としての一生を決定づけた。当時抱いた数々の疑問は私の好奇心を刺激し、長い期間を経て、その解答を自分なりに掴むことができたように思う。

日頃私たちは日常性に流されやすく、自分の生き方に真剣に向き合うことはほとんどない。しかし、今の私たちは日頃避けてきたものに目を向けざるを得なくなっている。非日常的な事態での体験は本当の自分を揺り動かす。それはその後の人生を決定づけるものになる。よって、大変な状況にただ振り回されるのではなく、もがき苦しみ、周囲の人々を巻き込みながら、懸命に生きて欲しい。それはのちのち大きな力になる。私はそう信じたい。